
「フリーマーケットおっ！」in グラインドハウス

ぱぴぶペ河野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「フリーマーケットおつ！」　uhn グラインドハウス

【Zコード】

Z33980

【作者名】

ぱぴふペ河野

【あらすじ】

千枝子様はとても素晴らしい人です。（そう言わないと殴られるから心に全然思っていないことを言つてますよ）

浪費癖の激しい悪妻　いやいや、『千枝子様』が衝動買いしたものをお溜めに溜めこんだ部屋がひとつ、『開かずの間』という名の倉庫と化している。

『開かずの間』の中で一番多いのは何といつても衣類だ。

試着もせんとホイホイとコートやらワンピースやらジャケットやらなんやらとバーゲンで買い込んでは、結局家で着てみたらば、みんなサイズが小さ過ぎて体に合わないという始末。

見事なまでに自分のボディーラインを無視し、着れやしないサイズばかりを懲りもせず買つなどというあきれた見栄つぱりさを展開させてる馬鹿　いやいや、千枝子様ですね、はい。

その千枝子様のお買いになつたほぼ新品の衣類の山と、それを着る為にだとほざいて購入したダイエットグッズやら、健康器具やら美容セシットやら……。

正直ふざけんなつちゅーのつー！

大体なー、痩せたいならソファーでトドみたいに寝ころんで菓子食いながらテレビ観るのはやめて、犬の散歩がてらウォーキングでもしろやー、と何度も中で叫んだことか。

あ、そういうやあ、ウォーキングするとか言つて有名ブランドのスポートウェアも買ってそれも放置してあるな……。

つーかよ、何で仕事から疲れて帰ってきた俺が犬の散歩を毎日毎日させられるのか、全くもつて意味がわからん。

今月、3キロ体重が落ちた。なんで俺ばかりがどんどん痩せていくんだよ！

大体、あの犬 ベルだつてなあ、お前と香代がちゃんと責任持つて飼うからつて、クソ高い血統書がついたトイプードルを勝手に買つたんじやねーか！

しかも、俺には事後報告で、毎つ回、毎回ー 何でも事後報告でつ！！！

本当にあのクソオンナ いえいえ、千枝子様ですよ、千枝子様（笑）は、本当に無駄な金ばかりを使うのが大好きで「いやこましねー、ええ。

そんなんてめえの存在が一番無駄な千・枝・子・様wが、先週いきなり俺にこいつ言いましたよ。

「ねえ、『あの部屋』で使わなくなつたもの、フリーマーケットで売つてきてよ」「

とな。

（いやいや、使わなくなつたモノじゃないだろ、その言い方は完全に間違つてるだろ）

『…つーか、何で俺がそんなんめんどくさいことをしなくちゃいけねーんだよ！

お前が勝手に買いこんだもんばっかなんだからお前でやれやー！』

「は？ なによ。その日。は…？ 何？ 嫌なの？」

「うわっ！ ヤバイ！

千枝子様が拳を固めて睨んでる！

「うわわっ！ ポリラと対峙するより十倍怖ええつ！」

「いえいえいえっ！勿論喜んでやらせて戴きますよっ！」

キリツと敬礼する勢いで、ゴリラーマン　いやいや、千枝子様に忠誠心を見せる俺…。

ちきしぇう、恐妻に全く頭があがらぬとは男子としてなんと情けないことか…。いやつ、仕方ないんだ。命はひとつしかない大切なものだからな。

…そして俺は、大切な大切な休日を一日潰して、フリーマーケット出店という無駄なストレスと労働を与えたわけである。

品物の運び出しからブースのセッティングから売り子から何から何まで一人でやれつてクソ千枝子様の命令でな……。

『ぶつちやけひとりじや無理です！　誰かっ！　助けてくださいっ！』

そう世界の中心　じゃなく、フリマ会場のやや隅っこのほうで叫びたいと切に願う……。

だいたい無謀にもほどがある。まずもつて俺はフリーマーケットなんてもの自体初体験で未知なる世界なのだ。

俺はとりあえず、市が主催する市民まつりの会場の一角である大浜公園へと到着し、受付をしてブースの確認と荷物の運びこみをする。

荷物はデカイクリアケース6個！　クソ重えーんだよバカヤロ！

それでも、家の開かずの間は半分ほどしか荷物が減つてないというホラー。さすがは千枝子様。ベスト無駄買い二ストなんて賞があつたらば、お前は必ず殿堂入りできるぜ。

ビニール紐で仕切りがしてある場所にブルーシートをひいて、まず思う。

(品物並べるのが面倒だ…つーか、どうやればいいんだ?)

俺はとりあえず両隣に交互に田をやり、段取りを観察した。

(へつ…? 何? 何?)

すげーな。右隣はコートやワンピースなんかをちゃんとハンガーにかけて、鉄棒みたいなのにかけて段ボールにカラフルなマーカーで『A L L 5 0 0 円』とわかりやすくディスプレイしてあるし、バツグなんかはポールにかけてあつたりと中々綺麗に商品がセッティングされている。……そんな方法があつたとは。

俺はただ、適当に並べて売りさばいてけばいいと思つてたから、驚いたわけだ。

(参つたぜ…、ちきしょつ……)

始める前から途方に暮れてうなだれたその時、

「何かお困りですか?」

右隣のお姉さんが俺の視線に気づいたのか、声をかけてくれた。

「あ…いや、あの…、じ、実は……」

俺はフリーマーケット初体験で何もわからぬことを説明して苦笑いした。

「フリマ出店はひとりじゃ絶対大変ですよ。私、セッティング終わつて手が空いてるから、お手伝いしますよ」

柔らかい笑顔で俺に救いの手を差し延べてくれたちょっとかわいいお姉さん。

き、キタ ! ! !

フリマ天使降臨つ !

ヤル気ゲージMAXを余裕で振り切ったぜ !

常日頃、悪妻千枝子と氷のように冷たい娘に虐げられる俺に、お姉さんの優しさは心に染み過ぎて…、あ、なんか目からなんか出そうだ。

「ありがとうございます」深々と頭を下げたら、

「いえいえ 困った時はお互い様ですよ 楽しみながら沢山売っちゃいましょう」

ええ娘や…、なんてええ娘なんや……。

感動して俺の横で、お姉さんはてきぱきと品物を出して

「衣類が多いから、良いものはたたんで並べて、まとめ売りするものはクリアケースに入れたままで、ケースに値段の紙を貼るといいと思いますよ」

自分のブースから厚紙とマジックとテープを持ってきて「値段はいくらにします?」と尋ねてきた。

「どれくらいがいいですかね…? 正直全然わからなくて」

「うーん、そうですねえ…なるべく早く売りさばきたいなら、500円くらいかな? 売れなければ徐々に値段を下げていけばいいと思します」

「なるほど、じゃあ500円でやります」

俺は厚紙に『A-L-500円』と書いてクリアケースに貼りつけた。

靴は手前に並べて、美容器具類は服の隣に並べてなんとか店っぽい形になった。

「おおう！ すいこ、なんか店っぽくなつましたよ」 わよつと感動してゐる俺を見てお姉さんは、「もし、お店を離れなきやいけない時は、遠慮なく声かけてくださいね」

「すみません…、あなたも出店してて忙しいのに…」 あまりにも親切なお姉さんに、俺は段々申し訳なくなつてきました。

「いいんですよ。私のブースは仲間4人でやってますから」

まぶしい。笑顔がめっちゃまぶしいぜー。

色々と話を聞けば、お姉さん 名前をマツさんといい、小学生のママ友達と品物を持ち寄り、毎回まつりのフコマ出店をしているらしく。

なるほど、どうりで手慣れてるわけだつひとり納得していぬと、あれよという間に人がどんどん集まってきた。

おつりー ヤバいですよ。俺、接客の経験などほとんび皆無な人間ですよ！

「ねえ、これもつと安くならないの？」

ババアの囁々しに値切りの声に若干イラつとした。『つーか、この品物はほぼ新品だぜ！ 定価1万を1500円で格安提供してんだぜ！ ふざけんなよ！ クソババア！』

そう言つて塩でも撒いてやりたいのは山々だが、俺はそんな勇気ある男ではなく、

「い、いや…ちょっとそれ以上は……」

苦笑いするしかなく。

「ふーん、じゃあいらない」

不機嫌な顔で立ち上がり踵を返した。

『バーカ、美顔器具なんぞお前にや宝の持ち腐れじゃ！　おどとい
きやがれ！』　めーいつぱい毒を吐いた。心の中では……。

「あのう……、このスポーツウェア、もつ少し安くなりませんか？」
『まーた値切りかよ！』

ん……？　と客の顔をみたら、おうふつ　かわいいネエチャンだ
つ

「じゃあ……、300円おまけして1200円でどうですか？」

えーえー、俺はそういう人間ですよ。

「私の、あんまり予算がないんです……。でもいいなあ、これ……。
でも定価で買つたら高いものだし、新品みたいに綺麗だからこれ以
上は無理ですよね……」

…かわいい娘の甘えた声つて素敵だよね？

「んーーーっ、じゃあ1000円でいいですよ」

当然そうなるよな。

「うわあっ　嬉しい～～っ　ありがとひげこま～す　」

かわいい笑顔

おっちゃん、超癒されるなあ～。値引きの価値アリだ。

「ねえ、これもうちよつと安く　」「
すいません、なりませんね」

即答だ、コノヤローっ！

俺は千枝子みたいな匂いのするクソババアには、びた一文値引き
しません！
はははは

『うわっ！ なんかスゲー楽しくなってきたぞ』

ふんっ、と悔しそうに踵を返したババアのたるんだ背中を見て、俺の心は爽快感に包まれていた。

かわいい娘には格安提供から更に値引き。図々しいクソババアには毅然とした態度で値引きお断り。つーか一層図々しいババアお断りの立て札置きてーな。

俺が店主なんだから、俺が正義なんだぜい
なーんて浮かれてたら、

「ちょっとお…、何で若い娘にだけサービスしてんのよ」「噛み付
きガメみたいな顔したオバハンがギロリと睨みながらクレームをつ
けてきた。

きたな、悪質クレーマーめ……。

「いえいえ、別に若い娘にだけといわけでは…」

「じゃあ私にも安くしなさいよ」

噛み付きガメが手にしていたのはコートとワントピース（しつこ
よつだが未着用で商札までついてる）

札の値段をちらりと見たら、合計2万ちょい。

ふ ゃ け ん な！

一着1500円という格安で売つてやつてんだぞ。今時流行りの
ファストファッションでさえもそんな値段じゃコートやワントピース
は新品では買えねーはずだろー！

「いやあ、未着用ですのでこれ以上値引きは無理ですね」

「ほら、やっぱり若い娘にひいきしてんじゃない！不公平で失礼な店ねつ！」

引き下がらないオバハン。

「いや、そんなこと言われても…」

うぜー ババアだな。さつさとどつか行けよ。

「 いや ちは買つてあげるお客様なんだからね！ 態度を考えなさい

「…」

んま――つ、なんじやけのしつかーババアはよ―――つ――!.

「このいちも商売なんですよね？」別にボランティア活動してる訳じ
やないですから」

悪いがてめえにやびた一文安く売らねーぞ！

「こやか」に笑ってやつたら、隣で若い娘が（買わないなら私が買う！）というオーラを放ち、オバハンの手に持つコートとワンピースをじっと見ていた。

「まゝ」

[三] いはし

「… 買うわよ。ふたつではい、3000円。」つちは全然損じやないし……」

おほつ
ババア、折れやがつたよ

「ありがとうございます」

俺はお金を受け取り紙袋に服を入れてオバハンに渡した。

むふふ。ちよいと悔しそうな顔のオバハンを見たら実に気分爽快（いやあ、フリマつて最高っ！）

品物の状態が良いせいもあつてか、午前中で6つあったクリアケースの中身は4つ空になった。

『ちよ、結構な売り上げだな！ これつー』

金庫を見たら野口さんがいっぽい。いやいや、千枝子が浪費した元値を考えたら微々たるものんだが。しかし、目の前の現金をみたらやはり心が踊るぜ。

『……売り上げ、ちよろまかしてやるか』

千枝子は値段は俺に任せるからと適当に丸投げしてくるから、一万くらいちよろまかしたとて、バレねーだ。つーか、バイト代なんて絶対払ってくれないだろうから、ここはひとつ労働者として当然の権利は得なきゃダメだろ。もちろん絶対に内緒でな……。

「それにしても……、喉渴いたし腹へつたなあ……」

そういえば、隣のブースのマリさんのが困ったことがあつたりと言つてくれてたな……。

右側をちらりと見たら、マリさんはブースの後ろに座りおひきつをほおばつてた。

（休憩中か……じゃ、しじうがないな……）と諦めようとしたら、「もしかして、お昼用意してないんですか？」

俺の視線に気付いたマリさんは立ち上がりこちらに歩み寄ってきた。

た。

「すいません……、俺、本当に段取り悪くて……」

苦笑いする俺にマリさんは、

「仕方ないですよ。初めてなんですから。それにしてかく売れましたね」

「こやあ、マコさんの『』指揮のお陰ですよ。本当に親切にありがとうございます」

「私、お昼終わって手が空いてますから、よかつたら露店で何か食べ物を調達してきたらどうですか？」

マコさんはこやかに微笑んだ。

なんて性格の良い娘さんなんだ。ちきじょい、ひらやましこぞ、『主人つ！』

「ありがとうございます！ ではお言葉に甘えて」

俺は、マコさんに店番をしてもらひて露店へダッシュした。

焼きそばとペットボトルのお茶とマコさんにお礼としてマリさんの仲間の分も入れて、たい焼きをひとつ買いブースへと急いで戻った。

「お帰りなさい、早かつたですね」

ただいま、マイハニー…じゃないや。いかんいかん、可憐らしい笑顔の出迎えについつこ…。

「マリさん、ありがとうございます！ これ、お礼にしあわせ安いけど、たい焼き、皆さんどいつも」

たい焼きの袋をマリさんに差し出すと、

「うわあっ 嬉しい～っ！ たい焼き大好きなんですよ～っ！ ありがとうございます」とやれこます、いただきます みんなに声かけてきます

嬉しそうに顔をほころばせて自分のグースに戻ったマコさんは、仲間達に「お隣さんにたい焼き貰っちゃったよ」と声を弾ませた。すると仲間達が、

「ありがとうございます」「いただきます」と俺に向けて和やかな笑顔を放った。

俺は思った。

『フリーマーケットバンザイ

』

と。

午後からの売り上げもぼちぼち良好だつた。

持ち帰りの荷物を極力減らしたいなら、どんどん値段を下げたほうがいいというマリさんのアドバイスもあり、俺はラストスパートでクリアケースの中身を全て半値で売り出した。

品物は勿論飛ぶように売れた。うーむ、千枝子様恐るべし。自分じゃ全然着れない残念さはあれど、ファッショńだけに関しては中々の田利きができるようだ。さすがは腐っても女子だな…。

俺は日が少し傾いたフリーマーケット終了の午後4時、少しオレンジが混じつた清々しい秋空を見上げて、心地よい疲労感と充実感に包まれていた。

親切なお隣さんに、素晴らしい田の保養になつたかわいい女の子のお客さん達。ありがとう、ありがとう

ウザくて図々しいババア連中よ、へへんっ、やまあみやがれ。結局貴様らの一匹たりとも値引きなんぞはしてやらなかつたぜ！ どうだ、参つたか！

ヤバい、ヤバい！

フリマ、超イイっ！！！

こんないい気分になれるなら、また出店したいぜ

俺はマリさん達にありがとうと手を振り、空っぽになつたクリアケースと共に車に乗りこみ、会場を後にして。

マイ財布の中には売り上げからちょうどまかした野口さんが5枚、樋口さんが1枚。あつたかい、財布があつたかい

俺は車の窓を開けて秋風に吹かれながら、鼻歌混じりで運転して家路を走った。

「たつだいまあ～」

かなり浮かれて玄関のドアを開けると、千枝子様は綺麗なお召し物を纏い待つてましたとばかりに玄関に駆けてきた。

「はい、全部売れました。これ、売り上げです」

俺が千枝子様に金庫を渡したらば、中身の札と小銭をバッグに突つ込み、

「ちょっと私、これから香代と一緒に出掛けるから。香代～つ、支度できたあ～つ？」

一階へ向けて声を発した。

「え……、どこへ行くんですか？」

そう尋ねた俺に、

「臨時収入で焼き肉食べに行くのよ

「は？？」

「……何か文句ある？」

千枝子様はギロリと睨む。「わあああ、めつひや怖えー……。

「あ、いや、俺…は？」

「ベルの散歩よろしくね」「へ？？？」

「それから、冷蔵庫に昨日の残りのカレーがあるから」

はあああ？ マジかよつ…。俺は連れてかないってか！

「……」

千枝子様は俺の顔をじっと見つめて

「財布をお出し」

唖ぬよつな低い声を吐いた。

『ギクッ！…！』

背中に嫌な汗をかく俺を見て、

「やつやつお出し……」「わああああつ！」「ココラが拳を振り上げたつ！」

「ひいこいつ…」「めんなさい…！」

俺は財布を差し出してひたすら謝った。

「…ふんつ…」

「アリ　いや、千枝子様は俺の長財布を開けて野口さんと樋口さんを数えて強奪　じゃなく、な、なんと自分のバッグから樋口さんを一枚取り出し、俺の財布にいたではありませんか！　マジですか？」

「い、いいんですか？」

「いろんな意味で声が震える俺に、

「無駄使いしないでよね」と小むく鼻を鳴らした。

『どの口が言うんだ、どの口が……』と思つたけど、まさか千枝子様がこんなに優しくしてくれるとは想定外だったから、驚きのほつがデカくて、

「あ、ありがとうございますー！」

と頭下げちまつたよ！

一階から香代が降りてきて、

「あ、お帰り」

とそっけなく一言。

「さ、香代ーっ 行こう！」

千枝子様は声を弾ませた。

「特上カルビが待つてるぜい！」

香代も意氣揚々でおー！と右手を上げてブーツを履き、母娘共に揃い、玄関のドアを開けて、

「ああ、そうそう。お父さん」

千枝子様はドアを閉めるギリギリで振り返つて、

「誕生日おめでとう」

一ツ口と笑みを浮かべた後にドアがパタンと閉まった。

「……」

ひとり玄関で震えること数秒。

叫びたい。叫ぶよ。いつちやつといいつスよね？

「おめでとう言ひながら焼き肉連れてけやつ……！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3398o/>

「フリーマーケットおっ！」in グラインドハウス

2010年10月16日14時56分発行